

# 博慈会 老研一口伝言

## 体のしくみ、病気のしくみ

### =第12回= 腸の働きⅢ・大腸癌



さて、鍋がおいしい季節になりました。気をつけよう太りすぎと大腸癌。今回は、最近増加している大腸の癌についてお話を進めます。

★情報は人のためならず

実は大腸癌ほど名医を迷医にしてしまう疾患はありません。といいますが、長年高血圧や糖尿病で治療していて、うまくコントロールできているなどと思われる人に限って、つい大腸癌が見逃されてしまうケースがあります。医者自身の責任もありますが、なが年のつきあいになるにつれ、患者さんが症状を恥ずかしくがって、最後までいわない場合があるのです。「先生には血圧と糖尿でかかっているの、お尻のことは別だと思つたから」と患者さん。医師の心得としては、麻薬捜査官のような非情の心をもって患者に接しなければ、早期に発見することは難しいといわざるをえません。たとえば、「便が細くなってきた、便に血が混じっていた、腹にしこりがある」という症状を聞いてからではほとんどの場合が、すでに手遅れであるからです。それに若いお嬢さんであるとい、大腸癌の検査を躊躇してしまふところが、病気を難しくしてしまうのです。

「それでは注腸検査（注）しましょう」とか、「大腸ファイバー（注）をいたしましょう」というのは、相手の人格、性、年齢とはまったく無関係の次元にある「医師の心」を鍛えておかないといえないのです。実は、医師自身にこの大腸癌が多くあります。

ことほど左様にその検査には過酷な状況が知られているからなのです。しかしまず大事なことは、少しでも便や腹の具合の異常が続けば、専門医かあまり知り合いない医師を訪れた方が、大腸疾患の場合は早期に発見できる場合があります。検便で様子を見たり、またCEAという癌マーカー（血液検査）で様子を見ましよう、と患者さんに同情している、見逃してしまう場合があります。残念ながら、まだこれらの検査での発見率は充分とはいえないところがあります。言い訳ではありませんが、私自身この大腸癌では苦い思いをもっております。

★欧米長期滞在者は、要注意  
この大腸癌が増えている原因の一つに、食の欧米化がよくいわれています。前号で述べましたように、日本人の腸は草食動物の腸に近く、肉食を主とする欧米人より長いのが特徴です。

脂肪分、肉汁を多くとると、それを分解するのに胆汁酸が多くです。この胆汁酸の一種に、腸の障害作用があることが動物実験で調べられています。そしてさらになにかもう一つの要素が加わると、発癌性が生じてくるのです。

なるべく日本人の腸の生理にあった食物繊維を多く含む緑黄色野菜をたくさん

とることが予防につながります。また抗酸化作用をもつ緑茶、EPAを多く含む魚もよいと思われます。排便も規則正しいにこしたことはありません。

★腸のポリープは、早い時期に撃つ

時に症状もない時期に人間ドックなどで腸のポリープが発見される人がいます。胃のポリープはしばらく放っておいても心配ありませんが、腸のポリープは早めにとっておくにこしたことはありません。前癌症状として認められています。胃のポリープがPHI-5の胃酸に接しているのに対して、腸のポリープは常に便に接しているのですから。

★痔と直腸癌の違い

病理組織的にはまったく違うのですが、痔と違っていたら痛だったというのもちよくちよくあります。どちらもお尻から出血がありますので、自分の都合のよいほうに解釈して診断を遅らせることが原因です。痛は出血量に比べ粘液性を帯びているのが特徴です。お尻に指をいれる直腸診をためらわずに受けてもらえば、直腸の内部が硬いかどうかですぐにわかります。

#### ●著者プロフィール

福生 吉裕（ふくお よしひろ）

一般財団法人 博慈会 老人病研究所 所長。

日本医科大学 連携教授。

『未病息災』（源草社）など著書多数。

Healthy

注1：バリウムをお尻より腸に入れてレントゲンで見る検査。当然洗腸をして内容物を出してから行う。  
注2：内視鏡をお尻から腸に入れて腸の様子をみる。横たわってお尻を突き出していなければならない。